

# デンマーク人の生活における民衆学校の役割

太田和敬

## Role of Felkehojskole in Danish Life

Kazuyuki Ota

### 1 はじめに

筆者は2002年9月から一年間、文教大学から海外留学の機会を与えられた。主な滞在先をオランダに設定し、ライデン大学の客員研究員の資格で研究を行ったのであるが、できるだけほかの国も経験すべく、デンマークに3カ月滞在した。主な理由はデンマークが発祥の地である民衆のための成人学校であるフォルケホイスコレを実際に見たいと考えたからである。そして実際にインターナショナルフォルケホイスコレに入学して体験することになった。

デンマークは、アメリカ、ペンシルバニア大学の調査によれば、国民の生活満足度が世界でもっとも高い国である。しかもそれはほとんど毎年のものであり、決して短期的な現象ではないのである。何故デンマーク人は自分達の生活にそれほど満足しているのだろうか。

以上のふたつを知ることがデンマークを留学の地として選択した理由であった。

しかし、帰国後いくつかの統計を知ることによって、デンマークのもつ意味はもっと大きなものであると気づいた。

最初のきっかけは2003年10月30日の朝日新聞に次のような記事が掲載されたことであった。「日本の競争力続伸、世界11位に 技術革新が寄与」と題する記事で、日本の競争力が一昨年の21位、昨年13位から11位になったというものであるが、ここで注目されるのはむしろ北欧4カ国の競争力の強さであろう。フィンランドが1位、スウェーデン3位、デンマーク4位、そして残るノルウェーが9位であった。新聞でも北欧の強さが指摘されている。

北欧は世界的に最も福祉の進んだ国家群として有名である。しかし、かつて最も福祉の進んだ国家であり、「揺りかごから墓場まで」と言われたイギリスは1970年代に「イギリス病」にかかったとされ、経済が落ち込み、その後サッチャーの新自由主義政策によって福祉政策は後退を余儀なくされた。そのとき指摘されたのは、福祉があまりに進むと国民の労働意欲が低下し、現状に甘えてしまうことで経済競争力が低下するのだという論理であった。それは単にイギリスだけのことではなく「先進国病」とまで言われたものである。

しかし、21世紀に入り、最も福祉の充実した国家群がそろって経済競争力でベスト10入りし、しかも北欧4カ国中3カ国は5位以内に入っているのである。典型的な高負担・高福祉の政策をとっているこれらの国がなぜ先進国病に陥らず、強い競争力を保っているのか。この究明はこれまで「近代化」のモデルをもっぱらアメリカ、イギリス、ドイツそしてフランスのような資本主

義大国にとってきた「価値観」「社会構成論理」を検討するという意味でも意味のあることであろう<sup>2)</sup>。

第二にデンマーク人の政治意識、社会意識が作り出す政治状況である。

デンマークはいろいろな意味で日本とよく似ているのだが、また大きく異なっている点もあった。日本は戦前デンマークをひとつの近代化モデルと意識した時期と人々があった。その理由は近代化の遅れを取り戻す努力をしていたこと、基本的な産業が農業であったことであった。このようなところからくる生活様式や国民意識が、日本とよく似ていると感じさせたのである。一言でいえば「身内意識」が強いことであろう。壁で囲まれた家、近所つきあいはよいが、外国人などに対してはあまりオープンでないことなどは、まるで日本で生活しているような感じを抱かせた。

しかし、その一方で、デンマーク人は「上に従う」「長いものに巻かれろ」というような生活意識・様式とはきわめて遠いところにある。つまり、主体的な生活様式が広く行き渡っており、それが政治にも反映されている。政治は生活をよりよくするために行われていることが、いろいろな面で実感されるし、将来の方向性について国民に対立が生まれたときには、国民投票で決めるという政治スタイルがかなり浸透している。日本では歴史上ただの一度も国民投票が行われたことがないことを考えてみれば、国民の意識が政治において尊重されているかどうか、違いは歴然である。

このことは国際政治汚職度調査によっても理解できる。Transparency Internationalという団体が毎年行っているこの調査は極めて興味深いものがあるので、表にまとめてみた<sup>3)</sup>。

	2003	2002	2001	2000	1999	1998	1997	1996	1995	平均
Finland	1	1	1	1	2	2	2	4	4	2
Iceland	2	4	4	6	5	5				4.3
Denmark	3	2	2	2	1	1	1	2	2	1.8
New Zealand	3	2	3	3	3	4	4	1	1	2.6
Singapore	5	5	4	6	7	7	9	7	3	5.9
Sweden	6	5	6	3	3	3	3	3	5	4.1
Netherlands	7	7	8	9	8	8	6	9	9	7.9
Australia	8	11	11	15	12	11	8	10	7	10.3
Norway	8	12	10	6	9	8	7	6	10	8.4
Switzerland	8	12	12	11	9	10	11	8	8	9.9

デンマークは政治的な汚職度がこの10年間の平均としても世界でもっとも低い国であり、常に清潔度3位以内に入っていることがわかる。

ちなみにアメリカやイギリスなど民主主義の代表的な国家とされる国はベストテンに一度も入っておらず、当然日本は極めて低い位置にある。

先述したようにデンマークは戦前から日本人にとってなじみの深い国であった。それは決してアンデルセンの故ではなく、戦前農業国家であった日本は、同じ農業国でありながら極めて豊かな社会を築いたデンマークに学ぶ姿勢があったからであり、デンマークを紹介した内村鑑三の影響が強い。内村は、『デンマルク国の話』という著作で、デンマークが19世紀ドイツとの戦いにやぶれたあと、国家再建に乗り出し、資源もない荒野を豊かな農地や森林に改造し、自然や地勢

的に恵まれない条件であるにもかかわらず、世界で最も豊かな生活を築いた歴史や現状を紹介した。長い封建的な鎖国政策の中で西欧に遅れをとった日本人にとって、デンマークは非常に親しみのもてる国家であった。

しかし、上記のような具体的な事実を考えれば、デンマークは決して戦前だけではなく、今でもまったく新しい意味で、日本が学ぶべき点をたくさんもっている国であることがわかる。高度な福祉国家であるにもかかわらず、非常に強い国際競争力を持ち、政治意識が高い一方世界でもっともクリーンな政治が行われており、そして、生活満足度も世界でもっとも高いのである。

ではそれらはなぜ可能であったのか。さまざまな理由があるだろうが、確実にそのひとつであると言えるのが、19世紀以来続いてきたデンマークの民衆教育、あるいは国民自身の学習運動である。日本の国際競争力は主に初等・中等教育のレベルの高さにあると考えられてきた。しかし、今日本が失速しているのは、おそらく現在の経済競争力はもはや初等・中等レベルの教育の質では不十分であり、高等教育や成人教育の充実度が関わってくるほどのレベルに達したとも考えられるのである。日本の高等教育のレベルはその経済力に比較して低いことは、残念ながら国際的には周知の事実である。そして、成人教育・学習も目立って活発とはいえない。企業内教育が機能していた時期はそこで労働の質を高めることができたが、リストラが吹き荒れる状況の中で、企業内教育も大きく転換しつつある。

他方デンマークを見ると、成人の自己教育運動は極めてさかんであり、それを支える制度もまた極めて充実している。ここにデンマークの経済競争力の高さの秘訣があると考えるのは、自然なことだろう。

## 2 デンマーク教育の特徴

私が昨年デンマークを訪れたときには、デンマークの教育について否定的な事実がおおく述べられていた。国際理科テストでデンマークの得点が低かったために、デンマークの科学教育の遅れが指摘されていたからである。現在でもデンマークでは古典的な人文教育の位置が高く、国際競争力をつけるための自然科学教育が遅れているというのである。実際、後述するように、デンマークの義務教育は9年間であるが、その間デンマークの国民学校（義務教育学校のこと）では試験を禁じられている。競争的な学力形成は義務教育では意図的に排除しているのだから、国際学力テストで低い点数しかとれないとしても不思議ではない。しかし、それにもかかわらず経済の国際競争力は格段に高い。つまりそれだけ高い労働力を生み出している競争力は、まず成人教育の分野に求められるのである。

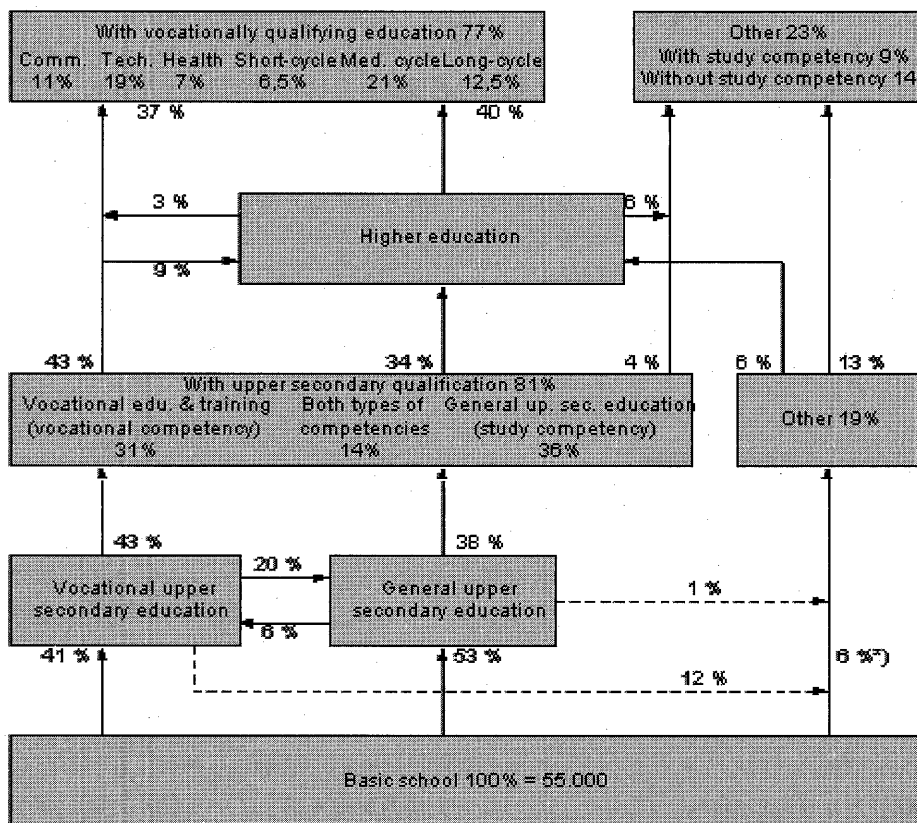
デンマークの教育の特質は次のように整理できる。

義務教育は9年間であるが、就学義務ではなく、家庭での教育も認めている。その場合9年間たった時点で学力テストで教育を受けた結果を証明する必要がある。通常の義務教育は9年制の国民学校 *folkeskole* で行われる。小学校と中学校が一緒になっている学校であり、文字通り義務教育学校である。

デンマークはオランダのような学校選択制度をとっているわけではなく、基本的に住宅地域に基づく通学区が存在する。居住地の学校でよければそのまま進学するが、他の学校に入学したければ、少なくとも余裕があれば認められる。理由が問われるわけではないようだ。ただし、それは同じ市内でなければ、まず認められないという。

デンマークではコムーネと呼ばれる基本的な自治体が非常に小さい。これは、生活にもっとも望ましい地域のサイズはどの程度か、という発想がデンマークにはあり、それがだいたい人口4、5万となっている。したがって、一つの自治体内の公立の国民学校は4校程度であり、その中で選択は可能になっている。ただし、デンマーク人の公立国民学校に対する信頼は大きいので、あまり問題はない、とデンマーク人の多くは語っていた。ただし、デンマークの国民学校にも、いろいろと深刻な問題があることは、否定できないのである。

デンマークの学校制度と進学割合<sup>9)</sup>



他方、公立学校に不満な親は、かなり容易に私立学校を設立することができ、実際にそうした親も少なくない。そして、以前は80%、今は75%の経費が国家から補助される。オランダのような公費補助を得るための人数制限はなく、生徒の人数によって補助金の金額が決まり、タクシメーターシステムと呼ばれている<sup>9)</sup>。もちろん生徒数があまり少ないと、教師の給与などを捻出することも困難になるから、ある程度の人数を集めることは、私立学校を維持する上では不可欠である。

次の中等学校は、3年制のギムナジウムと技術学校に分かれているが、だいたい成績で分かれるようだ。ただし、多くはギムナジウムに進学する。そして、次に大学と高等専門学校があるが、大学の入学システムは非常にユニークである。

基本的にポイント制度になっており、いろいろなやり方でポイントを獲得する。高等学校の成績がかなりよければ、その成績で必要なポイントを満たすことができ、そのまま大学に進学することができるが、決してやさしくはなく、かなりの生徒は入学を許可されない。入学試験をするわけではない。ポイントが足りなかった生徒は、ポイントを獲得できるさまざまな道に進むのである。高等学校とは異なる種類の学校に進学することもポイントを獲得する手段となるし、また、労働経験やボランティアでもポイントを獲得できる。そして、ポイントを充足すると大学に進学できる。

大学は基本的に大学院大学（修士課程）であり、学士レベルの専門学校もあり、高等教育はさかんである。

デンマークの国民学校では、最終学年まで試験を禁じている。もちろん、授業における理解度確認のための小テストなどは行われているのだろうが、正式な試験はない。つまり、オランダのCITOテストのような全国テストなどは最終学年までは存在しないわけである。そして、9学年の最終学年では、義務教育で修得すべき内容に関わる国家的な試験が行われており、家庭での義務教育を実施している人たちも同時に受ける。

このように、デンマークの教育は自由で、ゆとりのあるものと考えられるが、そうした動向も近年修正されつつある。2003年に国民学校のカリキュラムに関する大幅な改定が法的に行われたが、その基本動向は、学習量の増大である。

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
現在の授業時数	15	15	18	20	23	24	24	24	24	187
新提案授業時数	20	20	22	24	24	26	26	28	28	218 <sup>7)</sup>

前者がこれまでの授業数であり、後者が新たな提案である。学習量を増やす必要をデンマークは感じているわけである。特に自然科学系の弱点を克服する意図があるようだ<sup>8)</sup>。

デンマークでは、いまだにヨーロッパ中世から近世にかけての人文科学重視の姿勢が残っているようで、大学などでも、工科系統は主に専門学校、あるいは専門大学として位置づけられ、総合大学とは異なる学校になっている。だからといって教育のレベルが低いとされているわけではないが、大学の学部の中に入っていないことは、やはり社会的な位置づけが低いと考えられる。

次の特質は他国にはあまり例のない独特な学校が存在していることである。高校レベルおよび成人教育レベルで全寮制を基本とする学校があり、前者をエフタスコレ、後者をフォルケホイスコレという。エフタスコレはフォルケホイスコレの流れを汲むが、当初は問題を抱えた生徒を生活全体を改善することを通して立ち直らせる学校として成立したが、その教育効果の故に通常の生徒にも人気があるといわれている。後者は本論で扱う中心的な対象であるので、次に詳しく説明する。

### 3 フォルケホイスコレとは何か

フォルケホイスコレとは何か、とりあえずデンマーク文部省の説明を紹介しておこう。

成人のための学校であり、17歳半からの入学が許可される。いわゆる「フォルケリッヒ・オプリュスニング（民衆教育）」<sup>9)</sup>であり、個々の授業群とグループ化された授業群をもち、設立者や運営者によって定められた明確な「教育理念」をもっている。寄宿制をとり、教師と学生は

学校内の宿舎で共同生活するか、学校のごく近くに住んでいる<sup>10)</sup>。17歳半以上という年齢以外の入学資格はなく、卒業によって取得できる資格もない。ただ純粋に学びたいから入学して学ぶ学校である。

グルントヴィの思想に基づいて最初のフォルケホイスコレが設立されたのは1844年のことであり、以後フォルケホイスコレだけではなく、生涯学習の機関がデンマークでは発展していった。1990年代初期には、360校22万の学生が学んでいたとされる<sup>11)</sup>。

フォルケホイスコレはデンマーク教育の最も大きな特質のひとつである。その理由は、民衆教育の形態の国際的なレベルでの原型を示しているという点、多くの国は、このデンマークのフォルケホイスコレをまねて、その土地に合わせた民衆学校を作っていたのである<sup>12)</sup>。「デンマーク人にとって、フォルケホイスコレとは、歴史的な運動であると同時に民衆の生涯教育・学習のための現代の教育施設なのである。フォルケホイスコレは人々を啓蒙し民主主義の訓練をする。そして、おそらくデンマークが民衆教育と非制度的な教育についての国際的な思想に対してなした最も独創的な貢献として特徴づけられる。」<sup>13)</sup>

しかし、そうして国際的に広まっていったが、デンマークのとしている形態の最も重要な性質である「寄宿制」はほとんどの国が採用しなかった。寄宿制の形態がとられているのはスウェーデンやノルウェーの北欧の国の一部のフォルケホイスコレだけである。

何故、デンマークのフォルケホイスコレのみ、寄宿制をとっているのだろうか。あるいは、他の国はそれを捨てたのであろうか。

これは仮説的であるが、デンマークの価値観が農業共同体的な性格を残しているからであると考えられる。スウェーデンは隣の国であり、かつスカンディナビアという強い結びつきをもっているにもかかわらず、スウェーデンにこのフォルケホイスコレが移入されたときに、既に寄宿制は捨てられた。スウェーデンは工業国家であり、生活と労働・教育を分離して考える傾向が強いのではなかろうか。

現在の農業はかなり変わってきているが、昔の農業は、村としての共同作業が必要であり、また、一日の時間帯の一定の部分を農作業に当てるというのではなく、ほとんど一日全体が何らかの共同作業を必要としていた。そのような中で形成されてきた価値観や生活感覚がデンマークにおけるフォルケホイスコレの寄宿制に現れているのではなかろうか。

言うまでもなく寄宿制をとるということは、個人主義的な生活様式ではなく、共同的な生活様式を重視するということである。また、教育を生活と分離せず、生活全体の中で学ぶことを重視するということでもある。デンマークにおいては、「教育＝生活」という考え方が強いことを示している。そして農村的な価値観が今でも残っており、協同生活を重視する感覚がある。そして実際に寄宿制を前提としたフォルケホイスコレがたくさんあるために、それを前提にした学習がしやすい環境が整っているという点もあろう。しかしそれだけではなく、いわゆる「自由時間法」によって保障された自由時間利用のしやすさと、労働時間が守られている社会体制がこうした学習時間を可能にしていると考えられる。設備があっても、長い日時寄宿制の学校に入学して学ぶことは、勤務時間で拘束されていれば困難だからである。

「自由時間法 (Fritidslov)」は1968年に制定された法律で、「もし成人の団体が、学ぶことを欲したら、それが英語、リーマン幾何学、あるいは都市の革命的戦略、ビタミンの化学、ヨガ、自画像の執筆、そしてテープレコーダーの修理法であろうと、なんであれ、教師を見つけることができ、国家や自治体はその人件費の一定部分を負担しなければならぬ」という法律であ

る<sup>14)</sup>。

この法律によって、デンマークの学習運動がきわめてさかんになっているのであるが、移民をも含めたデンマークの統合に大きく寄与したとされる。移民もこの法律を使って、デンマーク語の学習をすることができ、また、移民の学習に移民がデンマーク語の教師として採用されることも可能にし、そのことが、全体としてのデンマークの国民統合にプラスに働いてきたという分析である<sup>15)</sup>。そしてその結果、デンマークには国語（デンマーク語）を話さない移民グループが存在しないとされる。ほかの国では多かれ少なかれ、公用語を話さない移民集団が存在するものである。

フォルケホイスコレの学習は決して、単なる「勉強」ではなく、実践的な活動を結びつけていることが多い。その代表とされるのが、風力発電と結びついたフォルケホイスコレ運動である。アスコウ・フォルケホイスコレで始まったこの運動は日本でも有名であり、橋爪氏のように運動そのものに関わっている人たちもいる<sup>16)</sup>。

さて次に筆者がデンマーク滞在中に直接接した3つのフォルケホイスコレを紹介しよう。

## リュ

1883年に開設され、100年以上の歴史をもつ典型的なグルントヴィイ型のフォルケホイスコレであるリュはデンマーク第二の都市であるユラン半島北部のオーフスの少し南にあり、周りは広々とした田園地帯のリュ市にある。リュはきわめて小さな町である。これはデンマーク全体に言えることで、日本のような大きな都市は首都のコペンハーゲンしかない。

筆者はデンマークのフォルケホイスコレを実際に経験したいと思い、いくつかの学校をしぼって見学に出かけた。オランダ滞在中の2003年11月のことである。そのときにリュにも出かけたのである。

リュは教育対象が専門化、特殊化する中で、比較的伝統的なアカデミックイメージの残っているフォルケホイスコレである。道路に面した表側はとても汚れた小さな校舎の貧弱な学校というイメージであったが、中に入ると緑の豊かな広々とした感じの校舎が立っている。

大きな池に直接接しており、ここでボート遊びなどを楽しむことができる。デンマーク全体がこうした田園風景に囲まれた国家であるから、多くのフォルケホイスコレは自然の中でさまざまなレジャーを楽しむ。

生徒募集用のパンフには次のように書かれている。

「フォルケホイスコレでは毎日一緒に住み、生活しています。その生活の中でたくさんの人が多くの友人を得ています。あるいは、唯一無二の友人を得るかも知れません。もちろん、自動的にそれを保証できるわけではありませんが。

寄宿舎のフォルケホイスコレの生活をともにする人もいますが、また山の上のホテルに行く人もいます。それも悪くありません。忙しいときや、テレビ視聴、あるいは個人の生活を忘れます。お互いに教育し合うような集団を獲得することもまた重要なことです。

ある一日がまた他の日で繰り返されることは滅多にありません。毎日新しいことがアレンジされます。遠足、緊張感のある講義、午後のお茶、映画、更に自分で発見することすべて。森のサイクリング、湖の散策、ハウスグループによる午後の催し等々。」(リュの入学パンフより)

フォルケホイスコレの教育は、学校によって異なるのはもちろんであるが、いくつかの共通項がある。

寄宿生活をして、生活全体をともにし、そのなかで学ぶことは、その最大の特質である。

第二に、カリキュラムはいくつかの選択肢があるが、学校の特質を反映した柱をもっており、いくつかの柱から構成され、そのなかから選択していくという形をとっている。

授業の科目は次の通りである。(毎年少しずつ変わるので、2003年冬学期のもの)

#### 歴史

ヨーロッパ史、考古学、成人教育の歴史

ジャーナリズム

#### 音楽

音楽基礎、楽曲分析、クラシック音楽理論、合奏、合唱

#### 美術

絵画、陶芸

#### 政治学

政治学、政治とメディア、地方と国、国際政治

#### 文化史

文学と詩、文学、作文

一日の活動はだいたい次のようになっている。

朝の集会を重視し、多くの場合そこで歌を歌う。フォルケホイスコレでは朝の合唱は多くの学校で重要な行事になっている。グルントヴィは多くの賛美歌を作曲し、デンマークの教会でたくさん歌われているためである。

正規の授業以外に、学生を中心とするさまざまな企画を重視する。コンサート、遠足あるいはカルチャーイブニングなどである。

入学資格もないし、卒業によって得る資格もないことは、また教師も特定の資格がないとなれないわけではないことを示している。フォルケホイスコレの教師の前歴は極めて多彩であり、また流動性も高い。

校長のヘンリック・キモース (Henrik Kidmose) はオーフス大学でジャーナリズムを教えている。ほかの教師たちの前歴は、俳優 (演劇)、陶芸家および芸術学校での陶芸教師 (陶芸)、美術学校教師 (美術)、スポーツプロデューサー (レクリエーション)、音楽家 (音楽)、カヤック教師 (スポーツ、レクリエーション) などである。これで見られるように、教職資格よりも実践的な仕事をしてきた者がフォルケホイスコレで教えていることがわかる。

これらの教師はほとんどが学校の敷地内の家かあるいは近所に住んでいる。そして、家でパーティをしたり、あるいは夜遅くまで学生と交流することも可能である。このように生活をともにすることが、教育スタイル上の特質なのである。

#### インターナショナル・フォルケホイスコレ

次にインターナショナル・フォルケホイスコレを紹介しよう。このフォルケホイスコレは私と妻が実際に2003年3月から6月までの短期3カ月のコースに入学して、実体験した学校である。そして、デンマークのフォルケホイスコレとしても非常にユニークな学校である。というのは、フォルケホイスコレはこれまで紹介してきたように、きわめてデンマーク的な存在であって、デ



ンマーク社会に根付いた特質をもっているが、このフォルケホイスコレは国際理解を標榜し、実際に学生の多くがデンマーク以外からやってくる。私が在籍していたときには、学生の出身国は22カ国に及んでいた。設立された第二次大戦前はデンマークや北欧の学生が多かったのであるが、近年ヨーロッパの学生は減り、むしろアジアやアフリカの学生が多くなっている。しかし、フォルケホイスコレとしての学習様式はあくまでもデンマークの伝統的なフォルケホイスコレに則ったものであって、したがって、ここの卒業生が出身国に帰ってから、フォルケホイスコレを設立することもあった。日本人はいつも多人数が在籍している。

まず設立の歴史を簡単に見ておこう<sup>17)</sup>。

インターナショナル・フォルケホイスコレを設立したのは、若いデンマーク人のペター・マニク (Peter Manniche) であり、彼は設立の1921年から1954年まで30年以上に渡って校長を勤めた。

第一次大戦中デンマークの軍務についていたマニクは、その間平和について、Jonstrup State Seminarium の Rudolph Benzon 校長を訪ねて議論を重ねてきたというが、1916年突然軍務を放棄してイギリスに渡ったのである。1911年からクウェーカー教徒と親交のあった彼は、クウェーカー教徒とより親密な関係をもつために、バーミンガム近郊にあったクウェーカー・カレッジに入った。特にその間大きな影響を与えられたのは、デンマークのフォルケホイスコレに倣って設立された Fircroft College の David Fry であり、彼との交流の中で、新しいフォルケホイスコレを設立することを考えはじめたのであった。戦後もしばらくイギリスに留まった彼は、学生と教師、諸国民、キリスト教とそれ以外の理念等の対立のない学校を考えていた。そして、'Modern Social Movement' 'Labour Laws in other countries' などのレポートを書き、次第に構想を具体化していった。特にその時期大きな影響を受けたのは、イギリス人でありながら、ドイツ人への敵愾心を否定した Oliver Lodge であったという。

1919年にデンマークに帰国したマニクは精力的に協力者を募り、資金を集める活動をしたあと、1921年に新しいフォルケホイスコレを設立したのである。その理念は3つにまとめられた。

- 1 世界各地から集まった学生が共に生活し、学ぶなかで、国際理解と平和を促進すること。
- 2 社会における多様な階層の人々がよりよい関係をもてるようにすること。
- 3 グルントヴィヤコルに発する精神的価値をより深く洞察・理解すること。

などであった。

しかしその後の発展は決してたやすいものではなく、いかにもデンマークのフォルケホイスコレの発展らしい様相を呈していた。それはまず校舎を作ることが、学生たちの大きな仕事であったことに現れていた。毎日数時間学生たちは校舎作りに励んだが、学生たちは不平に思うことはあまりなかったという。先に多くの国から学生が来ると書いたが、当初はそうではなく、デンマーク人が中心であり、外国人もデンマーク周辺の国家の出身者であった。ちなみに1926年の学期では、64名中、イギリス14名、ドイツ3名、オーストリア、ノルウェー各1名、スウェーデン7名であった。デンマーク的であったフォルケホイスコレであるから、国際理解をすることの意義はなかなか認められず、特に世界不況が激しくなつてからは、むしろ失業者の一時避難所のような様相を呈し、逆にそれが学生募集に有利に働いて、存続を可能にしたともいわれている。

第二次大戦後は、戦争中の民族的な問題が直接影響することもあったという。特にドイツ人学生に対して敵対的な態度をとる学生などがいて、国際的な対立が持ち込まれるという事態である。私が滞在していたときにも、いくつかの紛争の火種はあった。主に、イスラエルとパレスチナ、

そして中国とチベットの学生の間にあった紛争である。イスラエルとパレスチナは人数がそれぞれ一人ずつしかいなかったし、イブニング・カルチャーというそれぞれの民族文化の紹介を協力して行ったために、みなの前で政治的対立を引き起こすことはなかったが、一部のチベット人と中国人の間は終始険悪であった。イブニング・カルチャーが、インド、パキスタン、チベット、ネパールというグループと、中国というグループ編成であったために、中国人の何人かがチベットをひとつの国家のように扱うことに対して異議を唱え、チベット学生の話によると、さまざまな嫌がらせがあったという。また、授業中もチベットの学生のレポートに対して、中国人学生が激しく罵倒するなどして、かなり表面上の対立があった。一方、中国のカルチャー・イブニングでは、中国の少数民族政策がいかに少数民族を豊かにし、少数民族自身に喜ばれているかという、政府政策のビデオが見せられた。

もちろん、このような対立が隠微な形で隠されるのではなく、むしろ表面で議論される方が国際理解を促進させるためには有効であろう。しかし、一歩間違えると国際理解よりは国際対立が煽られる結果になる危険も孕んでいる。

さて、IPCのカリキュラムは次のようなグループ構成になっていた。

#### グローバルな視点

グローバリゼーション、持続的発展、NGOマネジメント、政治哲学、現代の諸問題、国際的対立のマネジメント、ジェンダーと発達、言語と社会

#### 個人および専門的スキル

コミュニケーション、文化間対話、集団形成、対立解決、映像技術、一つの世界と多文化、実践的環境

#### 言語

英会話、専門的英語、デンマーク語

#### 地域の視点

ヨーロッパ文化、アフリカ研究、デンマークおよびノルディック、中東、アメリカ研究、アジアの思想と生活、ラテンアメリカ文化と視点

デンマークの教育制度の中で、文字通り「国際理解」を世界中からやってきた学生とともに実現するのは、とても難しい。学生たちはそれぞれの文化を背負っており、無条件に理解しあえるわけではないからだ。たとえば、常に問題になっていたのが、「食後の後片付け」である。これを「ウォッシング・アップ」と呼んでいるのだが、学生の義務となっている。学生は10名程度のグループに編成されており、このグループでウォッシング・アップを担当する。しかし、例年のことのように、アフリカ出身の学生はほとんどウォッシング・アップをやらない。私がいたときにも、アフリカ出身の学生は10数名いたが、ウォッシング・アップをやる学生はエチオピア出身の学生ただ一人で、あとはいくら批判があってもやらなかった。あるとき、チベット出身の学生が当番の学生が食事を終えてでいていくときに、「君はウォッシング・アップの当番だぞ」と大声で叫んで呼び止めても、それを無視して行ってしまった。

アフリカやアジアは貧しい国が多いが、しかし、ヨーロッパの学校に留学する学生は多くの場合決して貧しくはない。貧しいアジア、アフリカというのは、国全体であって、そういう国では

貧富の差が激しく、豊かな層はきわめて豊かであり、家族は家事を召使に任せており、自分でやることはない。したがって、こうしたウォッシング・アップをやるようにいわれても、そうした習慣がないから、感覚的にやる気になれない面があるし、またやり方もわからないかも知れない。

フォルケホイスコレの費用は概して安いといえる。

先述したようにデンマークでは一般的に「タクシーメーター制度」という学校への補助制度がある。これはフォルケホイスコレでも同様であり、日本人が設立したフォルケホイスコレもあるが、補助金は変わらない。

IPCでは、次のような費用が示されている。

#### Spring Term 2004

22 weeks January 15 - June 16 2004 .....24.200 DKK

8 weeks January 15 - March 10 2004 .....12.600 DKK

14 weeks March 11 - June 16 2004 .....18.760 DKK

#### Autumn Term 2004

18 weeks August 15 - December 18 2004..... 20.250 DKK

8 weeks August 15 - October 9 2004.....12.600 DKK

10 weeks October 10 - December 18 2004..... 14.250 DKK

これは学生にとってまったく奨学金のない費用であるが、これによると、約一月換算8万円弱である。宿泊・食事も含めた全生活費用と授業料込みであるから、極めて安い。これは7割程度の補助金が国家から支出されるから、これで運営が可能なのである。そして、デンマーク人や開発途上国の出身の学生については、多くの場合、奨学金が出される。IPCの場合、2人部屋と1人部屋があり、1人部屋の方が割高なのであるが、日本人のように全額支払う必要がある学生は、2人部屋が多く、アフリカなどのような途上国出身の学生は多く一人部屋にいた。彼らは奨学金で支払うために、一人部屋でも経済的に無理がないのである。これは我々日本人からは、かなり奇妙な状況に写った。

## LO

次に独特なフォルケホイスコレであるLOを見てみよう。

LOは労働組合の連合体が作った学校で、労働運動の活動家を育てるのが第一の目的であるが、他方で労働者たちの息抜きのための場となっているようにも見える。施設も非常に立派で国からの補助金だけではなく、労働組合連合会からの補助もあって運営されているからである。食事は他のフォルケホイスコレよりはるかに上等であり、ホテルを兼ねているのだが、まさしくホテルのような感覚がある。そして、そのためか、他の学校にはない数日間の短い学習コースも用意されている。しかし、学習内容は労働組合に関する極めて固いものとなっている。

一日のスケジュールを見てみよう。

8：30 朝の合唱があり、その際特にこの学校で多い「ゲスト」のための歌が工夫される。

9：00-12：00 授業

12：00 昼食

13：00 授業

18：00 夕食

## 19：00 多様な活動

大体一般的なフォルケのパターンと同じである。

科目群は以下のようになっている。

民主主義理解と決定過程、イデオロギーと哲学、組織的および社会的労働、心理学とコミュニケーション、成人教育、民族的・文化的多様性と国際的友愛、IT、美術、音楽、など、比較的固い科目が並んでいる。これも、労働組合が労働運動の興隆のために設立した学校にふさわしい。しかし、芸術活動もさかんであり、立派なホールもある。

## 4 まとめ

さて、我々がデンマークのフォルケホイスコレから、あるいはデンマーク社会から学ぶことは何だろうか。

まずは課題において明らかにしたように、デンマーク社会が国民を主人公とするさまざまな仕組みを作り上げ、それにデンマークの教育システム、とくにフォルケホイスコレが大きな役割を果たしたことを確認することであろう。フォルケホイスコレは決して、単に科学技術の発展にそった労働力の質的向上をめざした教育施設ではない。しかし、フォルケホイスコレをはじめとする、多くの教育機会が提供され、さまざまな学習にデンマーク人が参加していることによって、生活の満足度が高くなり、そして結果として経済的な国際競争力が高くなっていると思われることである。そして、それを支えているのが、負担は大きいとしても、非常に充実した福祉体制であり、社会的な意味での協同性だということである。デンマークが多くのことを国民投票で決めていることは、決して偶然ではなく、フォルケホイスコレのような国民的な学習運動を継続してきた国民だからこそといえる。政治的な汚職が極めて少ない政治風土を作り上げているという点もこうしたことと不可分であると考えられる。

フォルケホイスコレは少しずつ変わりつつあるとIPCの校長は語っていた。一般的な意味での教養的な学校ではなく、専門に特化した学校に変貌しつつあるという。これは大学や高等専門学校などの高等教育機関へのアクセスが容易になったために、中等教育後の学校としての地位は相対的に弱くなったことを意味している。しかし、他方高等教育後、つまり成人になってから学習を継続するときの学習機関としての地位が相対的に高くなっていることを意味しているようにも思われる。そして、そこにこそ、デンマークの経済競争力と生活満足度を高める秘訣があると考えられるのである。

### 注

- 1) 詳しくは世界経済フォーラムのホームページ参照  
<http://www.weforum.org/site/homepublic.nsf/Content/United+States+in+Second+Place+Behind+Finland+in+Global+Competitiveness+Report>
- 2) この点については清水満も強く指摘している。『デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコレ」の世界』清水満 新評論1993
- 3) Transparency Internationalによる‘Corruption Survey Index’の各年度版を参照して作成した。2000年度を基準にしたので、この表では省かれているが、カナダはほとんどの年度において上位に入っており、またイギリスやアメリカ、日本は10位以内に入っている年度はない。

[http://www.transparency.org/cpi/2003/cpi2003\\_faq.en.html](http://www.transparency.org/cpi/2003/cpi2003_faq.en.html) を参照。

- 4) 内村鑑三『デンマルクの話』
- 5) <http://eng.uvm.dk/education/General/crosssection.htm?menuid=1505>
- 6) “Principles and issues in education” <http://eng.uvm.dk/publications/1prin/index.htm>
- 7) <http://www.uvm.dk/grundskole/generelinformation/timefordeling.html>
- 8) [http://www.uvm.dk/grundskole/udviklingsaktiviteter/initiativerorgprojkter/\\_klanemal-index-1025.html](http://www.uvm.dk/grundskole/udviklingsaktiviteter/initiativerorgprojkter/_klanemal-index-1025.html)
- 9) Folkelig oplysning は清水満によるときわめて日本語に翻訳しにくい語であり、そのために氏はこの語のまま使用している。デンマークでは、義務教育学校は9年間の「フォルケスコレ」と呼ばれており、これも独特のニュアンスをもっているようだ。国民という一種のナショリズム的なニュアンスがあるが、決して上からの統合的な響きではなく、市民というような自発的な運動の感覚がある。また、オプリュスニングは、一定の教育内容を教師が教えるというよりは、自らが自己教育のような感覚で啓蒙していく、社会の主人公としての自覚をもつ学習と、生産を切り開く技術を学ぶというような意味が込められている。
- 10) ‘Hvad er en Folkehojskole?’ <http://us.uvm.dk/voksen/hoejskoler/hvaderfolke.htm?menuid=351005>
- 11) マイクロソフト『エンカルタ』デンマークの項。
- 12) ドイツやオランダのフォルクスホッホシュレ、アメリカのコミュニティカレッジはその応用例であるとされている。
- 13) [Http://www.baaringhoejskole.dk/pdf/Engelsk2004.PDF](http://www.baaringhoejskole.dk/pdf/Engelsk2004.PDF)
- 14) ‘Danish Tradition of Folkeoplysning-a Tool of Autonomy and Integration’  
<http://olestig.dk/indvandrer/autonomy.html>
- 15) Ibid
- 16) <http://www.watsystems.net/~trust/hsizume.html> 参照
- 17) インターナショナル・フォルケホイスコレの歴史に関しては、すべて Max Lawson, “A celebration of 75 years of working for peace and international friendship” IPC、を参照した。